月村と神凪と夜の一族と　後編

十字架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月村と神凪と夜の一族と　後編

【Ｎコード】
Ｎ２８１３Ｑ

【作者名】
十字架

【あらすじ】
すずか！告白！！・・・まぁ結果はわかってるんですがね・・・

キーンコーンカーンコーン

京　「ん・・・ふぁぁぁ、終わったか、さて帰りに翡翠屋に寄ってケーキでも買ってすずか達を待つとするか」

この後どうなるのか知らずにノンキな京であった・・・

ア　「さて、帰るわよ、すずか」

す　「（どうしよう・・・放課後になっちゃったよぉ・・・告白するにしてもどうやって・・・）」

ア　「すずか？すずかってば！」

す　「はいぃぃぃ」

ア　「あんたってば今から緊張してどうするのよ・・・」

す　「だって・・・だって・・・」

ア　「まったく、いつも通りでいいじゃない、告白なんてその場の勢いよ」

す　「あ・・・アリサちゃん・・・」

ア　「それにあんたがしなかったらあたしが京を貰うわよ？」

す　「それは・・・」

ア　「それが嫌なら覚悟きめなさい！」

す　「アリサちゃん・・・うん！私やるよ！」

ア　「よし！そのいきだ！！」

ア　「そうと決まればさっさと着替えて京の家に行くわよ！」

す　「うん！」

そして京の家の前・・・

ア　「心の準備は出来た？」

す　「う、うん！頑張るよ！」

ア　「よし！行くわよ！」

ピンポーン・・・

京　「はい、どちら様で・・・ってお前らか」

ア　「えらく冷たいわね、こんな美少女が来てあげたのに」

京　「そりゃ失礼、まぁ入れよ」

ア　「お邪魔します」

す　「お、お邪魔します」

京　「おう、ゆっくりしてけ」

そして家に上がった第一声が・・・

ア　「あんた・・・家に何もないじゃない！って言うかベットと冷蔵庫とテレビしかないって・・・本当にここで生活してるわけ？」

京　「何もなくて悪かったな、とりあえず俺は寝れたらそれでいいんだよ」

す　「だからってこれはさすがになさすぎだよ」

ア　「士郎さんがたまに食事に誘うって言ってたのはこう言う事情なのね」

京　「まぁそう言う事だ、で、何か持ってきたのか？」

ア　「あたしはトランプとか持ってきたわよ」

す　「私はお姉ちゃんがやってたテレビゲームを持ってきたよ」

京　「ふむ・・・さて、何からやるかな？」

ア　「あたしは何でもいいわよ」

す　「私もなんでもいいよ」

京　「ならテレビゲームするか」

ア「わかったわ、配線とかわかる？」

京「いや、全くわからん」

す「なら私が用意するね」

ア「で、ソフトは何を持ってきたのよ？」

す「えっとね、バイオハザードでしょ、サイレンにピポサルに・・・」

京「ふむ、その中に怖いやつとかエグイのあるか？」

す「ならバイオハザードかサイレンだね」

ア「却下！！」

京「なんでだよ？」

ア「それは・・・そう！すずかが怖がるからよ！」

す「え？私平気だよ？夜中とかたまに一人でやってるし」

ア「うっ、そういえばそうだった・・・」

京「素直に怖いと言えばいいだろ？」

ア「／／／そうよ！怖いわよ！」

京　「んじゃ他のにするか」

す　「だね」

こうして時間は過ぎて行き夜になった・・・

京　「そういえば晩飯どうするんだ？」

す　「私はご飯いらないって言ってきちゃった」

ア　「あたしもよ」

京　「んじゃ何か適当に作るとするか」

ア　「あんた料理出来るの？」

京　「当たり前だろ・・・一人暮らしなんだし」

ア　「でも何か怖いわね・・・」

京　「安心しろ、俺の料理の師匠は桃子さんだ」

す　「なら安全だね」

ア　「そうね、桃子さんが師匠なら安心だわ」

京　「そうかい、なら作ってくるから適当に待ってろ」

バタン

ア　「さて、邪魔者はいなくなったわ、で？どうするの？」

す　「うっ・・・考えないようにしてたのに・・・」

ア　「あんたねぇ・・・言うんでしょ？」

す　「言うけど・・・やっぱりその・・・」

ア　「じれったいわねぇ！”あれ”を京に聞かせるわよ？！」

す　「それだけは許して！！自分で言うから！！」

ア　「ならいいのよ、まったくどうしてそこまで不安がるかなぁ」

す　「だって一族の事を話して嫌われたりするかもって思うと怖くて・・・」

ア　「考えすぎよ、あいつだって馬鹿じゃないし理解力もあるんだから遠慮なく行きなさい！」

す　「・・・そうだよね！大丈夫だよね！！」

ア　「そうよ！その勢いよ！」

す　「もしダメだったら記憶を消してやり直せばいいだけだし！！」

ア　「それはだめよ！すずかがダメならあたしがもらうもの」

す　「うぅ・・・やっぱり？」

ア　「当たり前よ、あんないい男次にいつ現れるかわからないもの」

す　「そうだよね！絶対に成功させてみてるよ！」

京　「何を？」

す　「それは私が京くんのこ・・・と・・・を・・・」

京　「うん、俺の事を？」

す　「・・・／／／／／／／／」

京　「すずかのやつ、どうしたんだ？」

ア　「何でもないわ、それよりも出来たの？」

京　「おう、たっぷり召し上がれ」

ア　「そうさせてもらうわ、それとすずか！いつまでも固まってないで起きなさい！！」

す　「・・・ハッ！う、うんそうだねいただきます／／／」

そして夕食後・・・

ア　「ごちそうさまでした」

す　「ごちそうさまでした」

京　「はい、お粗末さまでした」

ア　「それにしても桃子さんが師匠なだけあって美味しかったわ」

す　「そうだね、すっごく美味しかったよ京くん」

京　「そりゃどうも、んじゃ後片付けするからちょっと待っててくれ」

す　「それくらいやるよ！」

ア　「そうよ、ご馳走になったんだからそれくらいするわ」

京　「構わんよ、お客さんにさせるわけにはいかないんでな」

ア　「そんなこと気にしなくてもいいじゃない」

京　「ダメです、ってかすずかと何か話してたろ？俺が洗い物してる間に続き話しとけ」

す　「あ／／／うん／／／／」

ア　「それもそうね」

京　「それじゃちょっと行ってくるわ」

バタン

ア　「さて、あいつも気を利かしてくれたし、すずかも覚悟決めなさい」

す「うん・・・私・・・告白するね、私の気持ちと一族のことを！」

ア「それでいいのよ！あいつなら絶対に受け止めてくれるから！」

す「うん！私頑張るよ！」

京「何を頑張るんだ？」

す「私が京くんの事を好きって伝えることを！！」

京「そうか、俺も好きだぞ、すずか、あ、ケーキ食べるか？」

す「うん！ありがとう、きょう・・・くん？」

京「ん？どうした？食べないのか？」

ア「あ・・・あんたすずかの言ったこと聞いてた？」

京「ん？聞いてたし、返事もしたぞ？」

す「・・・

京　「起きたか？」

す　「京くん／／／／／／」

京　「どうした？」

す　「えっと・・・その・・・好きってｌｉｋｅ？ｌｏｖｅ？」

京　「すずかはどっちがいい？」

す　「それじゃあｌｏｖｅで／／／」

京　「んじゃそれで」

ア　「って軽すぎるわ！！！！！！！！！！」

京　「うおっ、いきなりどうしたんだ？アリサ」

ア　「どうしたじゃないでしょ！あんな適当でいいと思ってるわけ？！すずかは本気であんたのこと好きなのよ？！！」

京　「うむ、知っているが？」

ア、す　「・・・・・・・・へ？」

京　「だから知っていると言ってるだろ」

ア　「な・・・何で知ってるのよ？！」

京　「そりゃあんなに露骨に好意向けられてたら猿でも気付くぞ？」

ア　「確かにそうだけど・・・」

す　「あの・・・京くん？」

京　「どうした？」

す　「あのね・・・京がそう言ってくれるのは嬉しいんだけどね、私は京くんに話さなくちゃいけないことがあるの・・・」

京　「どうぞ」

す　「私達月村と複数の家は夜の一族と呼ばれる特殊な一族なの、血を用いる事で超常的な能力を行使する事が出来る一族・・・・・・・・通称吸血鬼

私達は人間とは比べ物にならないほどの身体性能を持っているんだけどね、でもその代わり体内の鉄分を生成する力が非常に弱いのだから血液を直接摂取する事でその強靭な体を維持しているの・・・だから事情を知ってしまった人には私達はある選択を迫ることになるんだ。全てを忘れるか、それとも友人か恋人としてそばにいるか・・・

京くんは・・・どっちでいてくれる？

京　「だからさっき言っただろ？好きだと」

す　「それじゃあ恋人として・・・そばにいてくれる・・・の？」

京　「だからさっきからそう言ってるじゃないか」

す　「京くん・・・ありがとうグスッ・・・本当に・・・ありがとう・・・ヒック」

京　「あーもう泣くな泣くな、それにな、実を言うをずっと知ってたんだよ一族のこと」

ア、す　「・・・・・・・・へ？」

京　「恭也の嫁って忍さんだろ？前にあったことがあるんだよ、その時に一族の事もお前の事も全部聞いてたんだよ」

す　「そ・・・そうだったの？」

京　「あぁ、それにその頃はもうお前の事が好きだったからな」

ア　「何よ・・・心配して損したじゃない！！」

京　「それはすまんな、もう夜も遅い二人とも送っていくわ」

す　「あ、うん／／／ありがとう」

ア　「私は鮫島を呼ぶから大丈夫よ」

京　「そうかならすずかだけでいいんだな、それじゃその鮫島さんが来るまで待つとするか」

ア　「えぇ」

す　「うん♪」

プルルルル

ア「もしもし、あたしよ、えぇわかったわ今から降りるわそれじゃあ」

京「来たのか？」

ア「えぇ」

す「それじゃあ降りようか」

ア「それじゃあまた学校で会いましょう」

す「うん、ばいばい♪」

京「じゃあな」

・・・

す　「ダメ・・・かな？」

京　「／／／寝かさないから覚悟しとけ／／／／／／／」

す　「うん！／／／／／／／」

そして行為が終わりその後・・・

す　「京くん／／／激しすぎだよ／／／」

京　「うるせ／／／」

そして後日・・・・・

アリサに盛大にからかわれ顔を真っ赤にしてゆでダコになった二人だった

（後書き）

書き終わりました！！結局京の過去は出てきませんでした・・・番外で書こうと思います！

それでは最後まで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます、またお会いしましょう・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2813q/

月村と神凪と夜の一族と　後編

2011年1月26日13時45分発行